

高千穂に登る



「高千穂に登りましょつや」

と切り出したのは、夫の高校時代の友人H氏である。K銀行から出水のM農協に向向して、週何回かわが家の前の国道338号を通過するので、時折お顔をお出しになる。

八月末の土曜日に登り、その晩は霧島にある会社のクラブに一泊しようと言つた。

山登りは私の希望であった。信州の山国育ちの私は山が好きだ。わが入来も四方を山に囲まれている。とは言つても、私には丘としか思えない。小学校時代、勤労奉仕で何回も山から木を引き出す作業をさせられたものだったが、リクリエーションとして登山は、高校三年生のとき蓼科山に登っただけで

ある2500メートルの山で、地元では下駄履きで登れると言われているが、結構きつく山頂にたどり着いたときの感激は忘れられない。

「まあ嬉しい。どこから登るの?」

と早速地図を持ち出す。見ると1574M信州では霧ヶ峰高原ほどの高さである。履物はと聞くと、H氏自身は登山靴にするが、彼の奥さんは運動靴だといふ。

「お弁当と水、氷砂糖、着替えを持って行けばいいでしょう。奥さんは杖だけの手ぶらでいいですよ」とうれいことを言ってくださる。霧島神宮の鳥居の前に九時半ごろ集合と決めた。

やはり靴は気掛かりであった。夫は革の編み上げ風のウォーキングシューズの殆ど履いていないものがある。川内に買い物に出た折り、夫は私のための登山靴を探そうと言つた。一万円足らずのものもあったが、夫はお揃いに二足買おうと言いだした。二足分には手元のお金が足りないのです、H氏の奥さんも運動靴と聞いていたしと、私は今回は節約して履

き慣れた運動靴でよいことに決めた。これが大間違
いだった。

当日は、遠く東の海上に台風があるとは言つもの
の、特に風もなく青空が覗いている。小ぶりのおむ
すび三個ついに、漬物やおかずのバック、熱い麦茶
の魔法瓶の水筒などは、夫のリュックである。雨具
の用意も必要に思われたので、二人のゴルフのウイ
ンドブレーカーも夫に背負ってもらつ。これが第
二の間違い。

私はショルダーバッグに財布やハンカチなど、頻
繁に取り出す必要のあるものをに入れて肩から斜め
に掛けた。

霧島神宮には、H氏夫妻と、K銀行の先輩に当たる
というM氏がお待ちで、高千穂河原まで先導しても
らう。そこで車庫に車を置いて、神社に柏手を打ち
いよいよ出発となった。それは緩やかな石畳の階段
から始まった。前後に三々五々登る人がある。

つづれ折りの石の道も切れて、山道になった。下
つて来る人達に聞くともまだ六分の一くらいだ、その

速度では頂上まで三時間はかかると言つ。やがて木
立も切れて行く手に百メートルほどの屏風のよう
な煉瓦色のガレ場が見えて来た。頂上は尾根になっ
ていて平らで高千穂の峰はその右側奥なのだとい
う。そろそろ雲行きも怪しくなつて来た。

ガレ場には、赤土の中からいかにも澄々らしく六
のあいた石がごつごつと顔を出している。それら
の石を踏みしめて登るのだが、長年のうちに落ち
るべきものは落ちていいるのだろう、びくともしな
い。先を行っていた子供連れが、風が出てきたと引
き返してきた。

ガレ場の頂上に着いて見下ろすと右手は深い火口
のあとで丸く抉れている。左手は崖である。俄に霧
と風が出て来た。風は火口を渦巻いて吹き上げ、
尾根の霧を払う。行く手は幅二間ほどあるかどうか
の細い尾根が延々と続いていて、吹き飛ばされな
いように這うようにして進む。

霧の切れた瞬間に左手に高千穂のすらりとした曲
線美がかいまみえた。見上げるとベテランのM氏は

私より遙か先を行き、夫もそれに続いていく。雨になつたら困るから離れないでと言つたのだが、夫は根がせつかちな性分なのだ。

尾根が終ると、最近作られたという一五メートル程の間隔の丸太の堰道が山頂に続いている。十本ごとに番号が書いてある。下りてくる人に聞くと百八十本あるという。あと何本といいながらH氏夫妻と登つた。百二十一本で途切れ、岩場といつのが、石伝いの難所になつた。なんとか攀じ登つたところで雨である。H氏夫妻は岩陰に寄つて、雨具を出している。夫はと見れば霧の中に影もない。

びしょ濡れになつて何とか登つて行くと上の方にご自分だけちゃっかりとブレイカーを着込んで岩に寄り掛かつて待つてゐる夫が、霧の中に見えた。寒さと怒りに震えて思はず泣きだした。こんな時は、先ず私を探しに下りてくるべきでしょう。

そそくさと濡れたシャツの上から赤いブレイカーを着て、また始まつた丸太の階段を登る。百八十本を終えるとやっと山頂である。霧はますます濃

く、鳥居も天の逆鋒もつつすらと影のようである。参拝も幻のようだ。

頂上の岩影に山小屋があつた。中では火が焚かれていてやっと人心地がついた。七八人の先客があり、私たちを追い越した人にも会つた。彼は二十三回目の登頂と言つた。

お弁当を平らげ、服も乾くと元氣が出て、一時少し前に茶店を出た。丸太の道は思つたより早く下りることが出来た。しかし運動靴は軽くて滑るので、足に力を入れるせいか前の腿が痛くなつてきた。尾根の細い道は、雨と風で危険な状態となり、転落しないように進むのだが、それは登りよりずっと長く感じられた。

ガレ場に来た。雨の石は滑る。よちよち歩きで最後になつてしまつた。と、前のめりに転倒してしまつたのだ。杖は後方に飛び、ズボンの膝が裂けた。暫く動けない。夫は

「何で登山靴を買わなかつたんだ」

とこれまた何でこんな場面だと思つてお小言であ

る。私だけ買つのはと遠慮した結果なのに。そして何歩か戻つたのかと思えば、手を引くでもなくまた先へ行ってしまふ。しかしさすが今回は霧の中、私の姿が見える範囲の所で立ち止まり、ゆっくりと小刻みに歩いていった。私は打撲の痛みも加わつて、永遠に続くかとも思えたガレ場を這うようにして下りた。

木立の道まで来るとH氏夫妻が待つていて下さつた。高千穂河原には、M氏が着替えも済ませて首を長くしていた。

日帰り予定のM氏と別れ、濡れたまま温泉のあるクラブハウスへと向かう。車のヒーターが入り、やっと人心地がついた。

散々な山登りだったが、今度こそは装備を万全にして、自分の物は自分で持つて、又チャレンジするんだと、懲りない私は思ったのでした。

（平成8年9月）